

同志社大学政策学部 風間規男ゼミ
『発見！食の魅力登別』



登別に来る観光客は、温泉というイメージを持っています。もちろん登別に住んでいる方も温泉のまちだという認識を持っていると思います。温泉以外に認識されていない魅力を認識し、開発していく必要があるのではないのでしょうか。

わたしたちが一番魅力があると考えたのは『食』です。登別には、安全性が高く、品質の良い食品が豊富にあります。それらがあるにもかかわらず、広く市民の方に認識されていないのではないのでしょうか。

わたしたちが考えた『登別マイルージ構想』は、登別が誇る食材を市民が認知して『食』の魅力を実感し

てもらふことと、商品を買ってもらふことを促進するためにポイント制度を設けることです。

市内は4つの区域に分断されていますが、区域間の交流を促進するため、商品を生産地に近い区域で買うとポイントが高くなる仕組みです。そして、このポイントを集めることで登別温泉に割引料金で入れるということを考えました。

この構想では、市民が食材の魅力を知ること、地元への愛着と誇りを持つことができ、地域間の移動が活発になることで、市としての一体感を強めることが可能になるのではないのでしょうか。

また、登別温泉への地元利用客の増加も見込めると思います。



▲市職員に質問する学生

同志社大学 ^{アングス} ANDAS (B)
『地獄の国際化』^{ツーリズム} ~Tourism
^{グローバリゼーション} ^{アット} ^{ノボリベツ}
Globalization @ Noboribetsu~



観光地が国際化するメリットは、少子高齢化による国内旅行者の減少に対応すること、もう1つは、多くの外国人が訪れることは、まちの魅力が評価されることにつながり、結果として自分のまちに愛着がわくのではないかと思います。

国際観光都市になるには、持続可能な成長が必要であり、そのためには旅行者の増加も大切ですが、魅力ある登別を実現させることが必要だと思います。ある資料によると、「わたしのまちには何でもあります」というのは、外国人観光客にとっては何もないのと一緒

だ」という言葉がありました。そのため、登別特有の取り組みやリピーターの確保が必要だと思います。

わたしたちが考えたのは、ウォークラリー形式で登別に点在する鬼の像を巡り、プレゼントをもらうというイベントです。題して『オニを追っておにごっこ@登別』。これはこぐまをさらった鬼を探し出すという設定で行います。携帯端末で市内にある鬼の像の情報を読み取ることで、犯人の鬼を特定する仕組みです

(犯人は角が3本ある鬼など)。そして犯人を捜せた人には鬼と一緒に記念撮影し、後日写真とともに手紙を送ります。その中に観光案内などを入れ、忘れかけていた思い出をよみがえらせてリピーターの増加につなげようというものです。



市役所若手職員チーム
『市民と楽しむのぼりべつ』



市民の皆さんに登別のイメージとして何を思い浮かべるかアンケートを行ったところ、温泉と答える方がだんとつに多い結果となりました。

しかし、選んだ理由は「登別といえば温泉と聞くから」など、市外の人から見たイメージがそのまま自分たちのイメージになっているという印象が強く残りました。

住んでいるわたしたちでさえ『登別らしさ』を実感しないまま生活しているということは、観光客も温泉や鬼などの表面的な魅力のみを感じて帰っていると思います。これでは、まちとしての良さが伝わらないと思います。

わたしたちに登別に住んでいるという意識が芽生え

てくれば、観光客にも登別の良さが伝わると思います。

アンケートの中で、温泉以外の自慢できる場所として「自然が多い」「海産物おいしい」などの回答が多くありました。例えば「ここから見た海がきれい」「ここの桜が素晴らしい」などのおすすめスポットも立派な『登別らしさ』だと思います。こういう場所を市民のみんなでも共有して楽しむことができれば、明るい生活に近づくとと思います。

これから団塊の世代の退職を迎え、セカンドライフを始める人たちに散策路のウォーキングやおすすめスポットなどで四季を感じてもらったり、温泉に入ってもらったりして、今まで住んできた登別をもう一度実感・満喫してもらいたいと思います。

